

奥多摩の生態系



奥多摩の地図

山岳地形が生む環境の帯

奥多摩は、雲取山のような 2,000 m 級の山地から河川沿いの低地まで、わずかな距離で環境が大きく切り替わる地域です。この標高差によって気温や降水量が変化し、暖温帯から冷温帯、亜寒帯までの植生が連続的に現れます。

低地や谷沿いは温暖で湿度が高く、ケヤキ、コナラ、イロハモミジなどの落葉広葉樹が多く見られます。深い谷では日照が限られるため、シオジやサワグルミの溪畔林が発達します。

中～高標高帯では気温の低下に伴い、ミズナラ、ブナを中心とした冷温帯の森林が広がります。北

側の急斜面では、ヤマボウシ・ブナ群集やイヌブナの自然林が特徴的です。

雲取山周辺の亜寒帯域ではウラジロモミやコメツガが見られ、山頂付近ではシラビソ、オオシラビソへと移り変わります。林床は草本が少なく、コケ層が発達する寒冷地らしい景観になります。

これらの植生帯は本来、標高や地形に応じて自然に分布するため、海拔約 50 m の学習園でそのまの姿を再現することはできませんが、日陰づくりや水管理などの工夫によって、各帯の特徴が感じられるような植栽展示を行っています。

地質が決める育つ植物

奥多摩の山々の基盤は、秩父帯・四万十帯と呼ばれる古い地質帯に属し、砂岩、泥岩、チャート、石灰岩などがモザイク状に分布しています。

砂岩と泥岩主体の山地は保水性が高く、冷温帯のブナ、ミズナラ林が育ちやすい環境です。一方、斜面上部の痩せ地は乾きやすく、アカシデやイヌシデなどの陽樹も見られます。この地質、気候、斜面方位の組み合わせが、近接したエリアに異なる植生群集を生み出します。



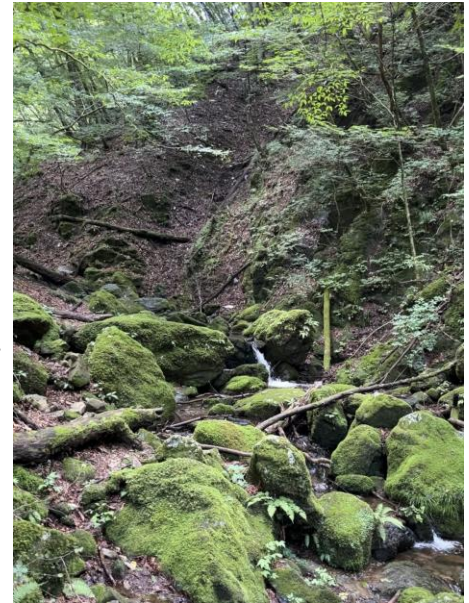
ヒメシャガ(東京都絶滅危惧 IA 類)

特に日原周辺は大規模な石灰岩体が分布し、鍾乳洞や急峻な岩壁をつくっています。石灰岩やチャートはアルカリ性の土壌を生み、一般的な山地よりも乾きやすい環境です。この条件に耐えられる植物は限られ、チチブミネバリ、ツゲ、フジウツギ、リュウノウギク、ヒメシャガのような、薄くて乾いた土壌にも耐える種が多く見られます。

水が生み出す溪谷と湿生環境

奥多摩は多摩川と支流の秋川や日原川をはじめ、無数の小溪流が山地を切り込み、深い谷を形成してきました。谷は日照が少なく湿度が高いため、水を好む植物の避難地（レフュージア）となります。

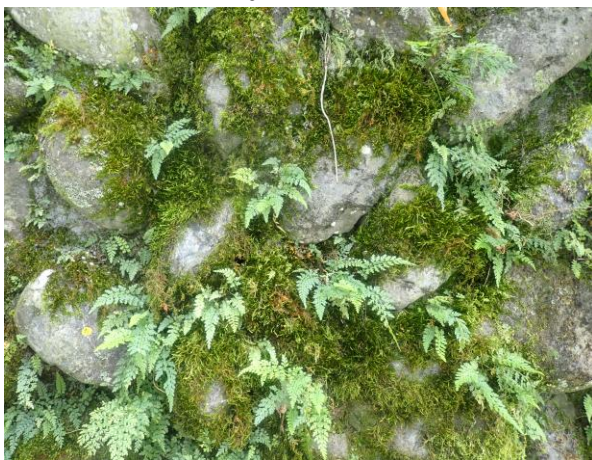
溪畔林にはシオジ、サワグルミ、トチノキ、カツラなどの高木、フサザクラ、チドリノキなどの中木、タマアジサイを含む低木が見られます。また、滝や沢沿いではラショウモンカズラ、フシグロセンノウ、キヨスミイトゴケなど、湿潤環境に依存する植物が特徴的な景観をつくります。



御岳山の小溪流

人工林が生態系にもたらすもの

奥多摩では古くから林業が営まれ、多摩川が木材輸送の要となってきた歴史があります。戦後にはスギ・ヒノキ・サワラが大規模に植林され、現在では森林の半分以上が人工林となっています。これらの樹種はもともと山地の岩角地に自然分布するものですが、植林によって分布が斜面上部まで広がりました。その結果、林床の光量や水分条件が大きく変化し、暗い林床が広がるようになりました。



人工的な石垣に生えるシダ類とコケ類

人工林は一般に生物相が単調になりやすいとされます。しかし、放置された人工林では、林床の暗さに加え、倒木や崩壊跡が地表面の様々な凹凸をつくります。そこに湿気を好むシダ類、コケ類、一部のラン科植物、倒木上に生育する菌類などが局所的に見られることもあります。全体として多様性は高いわけではありませんが、人工的であっても、こうした小さな環境が特定の種にとっての居場所になることもあるのです。